

はじめに

開拓者の生活は、今日のアメリカの人々にとって何か心に訴えるものがある。それも当然のことで、私たちのほとんどの遺産は、当時のたくましく勇氣ある人々から受け継いだものだからである。

それでもなお疑問は残る。なぜ多くの物を所有する現代の私たちが、ほんのわずかな物しか持たない昔の人々の生活を知ること、こんなにも喜びを感じるのだろうか。答えははっきりしている。人は「ほんの少しの物」がなかなか手に入らないとき、まず何を優先しようかと、とても慎重になる。もし生活が質素なら、いま手にしている粗末な物は、いつまでも価値ある物でありつづけるはずだ。煩雑さを捨て、ほんとうに価値ある物だけを受け入れ、それを大切にして生活するようになる。それが物であっても、友だちであっても、自分自身の態度、あるいは心のありようであっても。

昔の生活への興味と、私たちの祖先への尊敬の気持ちを持つて、私はこの物語の時代設定を開拓時代に置くことにした。

何カ月ものあいだ、私はクラークやマーティ、あるいはここに登場する人たちと想像の世界で生活を共にし、やがて私の心の中で、そして原稿用紙の上で彼らはいきいきとした、いつも変わらない人物となつていった。そして、登場人物一人ひとりが、現代の私たちと共通する多くの思いを持つてい

るように感じてきた。

クラークは、天の神さまを心から信じ、逆境の中にあるときも絶えず誠実で思慮深くありつづけ、洗練こそされていないが、ほんとうの意味での紳士である。

マーティは、若くて活発な誠実さと素直さ、そして困難に出合ったときにもしつかりと耐えていく強い心を持っている。

私は読者のみなさんが、すべてのことをご存じでいらつしやる、クラークとマーティの信じる神さまに近づいて、聖霊の力を受けられるように、またみなさんが人間のほんとうの愛とは何かをほんの少しでも感じとつてくださればと願い、考えてきました。

思いやりがあり、情け深く、そしてもちろん優しく。これこそ本書「Love Comes Softly（そつと愛が）」の言おうとしているテーマです。みなさんが、この愛を見出してくださいれば幸いです。

ジャネット・オーク

親しい友であり、師であつたイレーネ・リンドバーグにささげる。

そつと愛が——もくじ

| | |
|----------|-----|
| はじめに | 1 |
| 不慮の死 | 9 |
| ミッシーのママ | 20 |
| 形だけの結婚 | 27 |
| 朝のもめごと | 36 |
| 涙と怒り | 47 |
| 大掃除 | 54 |
| うれしいお客さま | 63 |
| 無慈悲な世の中 | 72 |
| 主の日 | 83 |
| 豚の屠殺 | 93 |
| 一緒に | 97 |
| 仕立てあがり | 101 |
| エレン | 109 |
| ミッシーの誕生日 | 117 |
| あばかれた秘密 | 130 |
| 心づかい | 134 |
| 謎の外出 | 140 |

クリスマスの準備

吹雪のイヴ

マー・グラハムの訪問

赤ちゃん

マーの心のうち

さまざまな訪問客

新しい発見

火事

納屋の再建

ローラ

飲びの日

種まき

悲しみ

生きる力

そつと愛が

訳者あとがき

266

253 249 245 237 230 226 222 212 208 193 187 180 168 153 146

不慮の死

明るい朝の日ざしが幌馬車の屋根にふり注いで、十月中旬にしては珍しく暖かな一日になりそうだった。マーティは寝つかれない夜を過ごし、うとうとした眠りから今やつと目覚めようとしていた。どうしてこんなに重苦しい、いやな気分なんだろうと彼女は思った。いつもは、これから始まる新しい一日への期待と冒険にワクワクしながら目を覚ますのに。

とつぜん、すべてのが心によみがえってくる、マーティはたったいま^は這い^だしてきた毛布の上に身を投げだし、細い体を震わせてむせび泣いた。

クレムは死んでしまった。強くて誇らしげで、あつという間にマーティの心をとらえてしまった、少年のようなクレム。自信に満ちた、ほとんど自慢げに見えるクレムだったが、そんな彼にマーティが会ってからまだ二年にもなっていないかった。そして愛するクレムの妻となつて西部に向かい、冒険に満ちた日々を過ごしたのはわずか十四カ月間だった。それも、きのうまで。

きのうでマーティのまわりの全世界は碎け散ってしまった。男の人たちがやってきて、クレムが死んだと告げた。馬が倒れ、クレムは落馬し、即死した、と。彼らはすぐに馬を始末したことを告げ、マーティと一緒にこないかと言ったが、彼女は行こうとしなかった。

——いいえ、ここにいろわ。

——うちのかみさんをここにこさせようか？

——いいえ、だいじょうぶ。

——遺体の面倒は見るよ。かみさんがうまく取り仕切ってくれるし、近所の連中が埋葬の準備もしてくれるだろうから。運よく巡回牧師がこの地域を回っていて、ほんとうならほかのところへ行くはずだったが、きょうはここに泊まっていつてくれることになった。

ほんとうに一緒にきたくないのか、と彼らはたずねた。

——いいえ、わたしのことはかまわないで。

——でも、ここに一人にしておきたくないね。

——わたし、一人でいたいんです。

——それじゃ、またくるよ。心配しなくていいからな、わしらが何もかも面倒見るから。

——すみません。

彼らは去っていった。マーティの数少ない毛布の一枚に愛するクレムの遺体を包み、村人の馬の背に乗せ、ゆつくりと手綱を引いて行ってしまった。そして一夜が明けた今、太陽がまぶしいばかりに輝いていた。

（どうしてお日さまが出ているんだろう？）きょうは冷たい風が吹き荒れて、心までも凍らす、死んだような日でなければならぬはずなのに。自然界はマーティの心が感じられないのだろうか。

（ああ、クレム、クレム……わたしは、いつたいていどうすればいいの？）

マーティは泣いた。西部へ向かう途中、しかも秋になってしまった今、マーティには家へ帰るすべ

もなかった。知っている人もいないこの土地で、まして彼の子どもを宿している身では、途方に暮れるのは無理もなかった。今このとき、マーティの思いは、ただ失ったものの大きさと心の痛み、悲しみしかなかった。

クレムは心躍らせて西部へやってきた。

「おれたちは新しい土地へ行ったら、なんだって欲しいものを手に入れられるんだ。土地だってお望みさだいいさ」

「でも、野生の動物がいるでしょ。そ、それに、インディアンなんかは？」

恐ろしそうに言うマーティを笑って、クレムはたくましい腕で彼女を抱きあげ、クルクルと回った。「家はどうするの？ わたしたちが目的地に着くころには、冬になってるわよ」

「近くに住んでる人たちが、家を作るのを手伝ってくれるさ。何もかも聞いてきたんだ。あっちでは、みんな互いに助け合ってるね」

そう、彼らには必要とあれば、たとえその人が礼儀知らずで向こう見ずな新参者だったとしても、助けてくれるだろう。また、自分たちにとって大切な作物を畑に放りだしたままでも、屋根を葺く手伝いをするだろう。なぜなら、そこに住む人々は、厳しい冬の風をいやというほど知りつくしているからだ。

「うまくやっていけるからだいじょうぶ。何も心配しないでいいよ」とクレムは約束してくれた。

途中、農場に立ち寄り、クレムはいろいろな情報を聞きだした。コーヒーをだしてくれて、自称「隣人」というその農家の主人は、小川のところまでは自分の所有地だが、その向こう側にはまだ誰も登録し

ていない土地があると話してくれた。クレムはうれしさのあまり叫びだしたいのを必死でこらえていた。夢がもうすぐかなえられると思うと、体中が喜びで震えるようだった。二人は先を急いだが、おんぼろの幌馬車で旅するには少し無理をすぎたようだ。もう少しで目的地に着くというのに、車輪が壊れて修理することもできなくなってしまった。しかたなく、その夜は野宿することにした。そこはまだ、例の隣人の土地だった。岩や木を積みあげて壊れた車輪のところにあてがい、どうにか馬車を平らにした。朝になってみると、さらに運の悪いことに馬が一頭逃げてしまっていて、つないであつた綱は切れてだらんとぶら下がっていた。

クレムは残っていたもう一頭の馬で助けを呼びにいったが、そのまま戻ってこなかった。今では、彼の名前で登録される土地も、彼のものとなるべき家も幻となつてしまった。

外で物音がしたので幌馬車の中からそつとのぞいてみると、近くに住んでいるいかつい顔をした男たちが四人、大きなモミの木の下を静かに黙々と掘つていた。彼らが何を掘っているかがわかつたとき、新たな悲しみがマーティを襲つた。

（クレムの墓だわ……）ああ、あれはほんとうのことだつたんだ。あの恐ろしい悪夢は実際に起こつたことだつたんだ。クレムは自分を残していつてしまった。そして今、この見も知らぬ人の土地に葬られようとしている。

（ああ、クレム、わたしはどうしたらいいの？）

マーティは涙がかれるまで泣いた。穴掘りの仕事は続いた。シャベルが土を削り、土がひと投げさされるたびに自分の魂が削りとられていくような気がした。時が過ぎていった。

とつぜん、ほかの物音が聞こえ、村の人たちがやってきたのがわかった。しつかりしないとクレムに笑われる。

マーティは毛布の中から這いだし、クシヤクシヤになった髪をなんとかまとめ、すばやく濃紺の木綿の服に着替えた。自分の持つている数少ない服のうちで、こんなときに着るには、この服がいちばん合っていると思った。タオルとくしをつかんでそつと幌馬車から抜けだし、泉のところへ行つて涙に汚れた顔を洗い、もつれた髪をとかした。それから背筋を伸ばし、あごを上げ、新しい隣人に会いに戻つていった。

彼らはみな親切だった。マーティはその親切が「あわれみ」ではなく「理解」からきていると感じた。ここ、西部での暮らしは厳しく、ほとんどの人が同じような苦しく辛い経験をしていた。それでも人々はへこたれてはいられなかった。ただ先に進むしかない。ここでは、自分のためにも他人のためにも、人をあわれんでいる暇はなかった。直面しなければならぬことには全身でぶつかつていった。死もまた、たとえそれが辛くても生活の一部として受け入れ、生きつづけていかなければならなかった。

巡回牧師が葬儀の始まりを告げ、たった一人の遺族である（というのは、誰もマーティがクレムの赤ちゃんを身ごもっているのに気づいていなかったたので）、この小柄で寂しげな未亡人に悔やみのことばを述べた。

牧師はこのようなときにふさわしい慰めと励ましのことばを語った。近所の人たちは心からの同情をもつて、以前に何度も聞いたことのあるこのことばに静かに耳を傾けていた。ささやかな葬儀が終

わると、マーティは墓を離れ幌馬車へと戻っていった。そして四人の男は、頑丈な木の箱の上にシャベルで土をかぶせる仕事にかかった。この棺ひつぎは、近所の男たちが何人かで、きょうの葬儀に間に合わせるために徹夜で作りあげたものだ。マーティが去ろうとしたとき、一人の女がやってきて、マーティのきやしゃな肩に手を置いて話しかけた。

「わたし、ワンダ・マーシャルっていうの。わたしたちのところには一つしか部屋がなくて申しわけないんだけど、よかつたらあなたが落ち着くまで二、三日泊まっていてくださいいな」

「ありがとう」マーティは、ほとんどささやくような声で言った。

「でも、ご迷惑はかけられませんもの。それに、ここにしばらくいるつもりなんです。いろいろと考えなければなりませんし」

「わかりますわ」と静かに言って、その女は去っていった。

マーティが幌馬車のほうへ歩いていくと、こんどは年配の優しそうな婦人の手がマーティを引き止めた。

「あなたにとって今が辛いときだつてことは、わたしにはよくわかりますよ。何年も前に、わたしも最初の夫を亡くしましたからね」

しばらくしてまた言った。「何かあてがあるようにも見えないけど」

マーティがかすかに首を振るのを見て、その女の人は言った。

「うちに泊まらせてあげることにはできないけど……わたしの家も家族が多いもんでね。でも、食べ物なら助けてあげられますよ。だから、もしよかつたら、幌馬車をわたしたちのところに持ってらっし

やいな。荷造りを手伝わせてもらいますよ。それに、あなたがここを出ていくときには、いつでもうちの人が、ベン・グラハムっていうんですがね、町まで送りますから」

「ありがとう。もししばらくはこのままでいたいで……」とマーティはつぶやいた。町に行つたところであつた一晩泊まるお金もなく、働く手だてもないなんてどうして言えるだろう。若くて何の経験もない、まして身ごもっている女が、いつたいどんな仕事を見つけられるというのだろう？ というより、自分にどんな未来があるというのだろうか？ 重い足取りで幌馬車に戻ると、疲れた手で幌のおおいを持ちあげた。幌の中に這つていつて、ひたすらみんなの視界から消え、世の中から忘れ去られてしまいたかつた。

日中の幌の中は焼けつくような暑さで、ただでさえ疲れて頭がクラクラしているのに、ますます気分が悪くなつてしまつた。マーティは中から這いだし、身を投げだすようにして降りると、馬車で日陰になつた草の上に座り、壊れた車輪ほんろに寄りかかつた。

マーティの感覚は、まるで彼女をほんろ翻弄しているように、空想の世界と失つた者への強烈な思いのあいだを漂つていた。何がほんとうに起こつたことで、何がただの空想だけなのかわからず、それが頭の中をグルグルと駆けめぐつていた。マーティが心の中で模索しながら座っていると、とつぜんすぐ近くで男の人の声がしたので驚いて飛びあがつてしまつた。

「奥さん」

マーティは見上げた。男の人が咳払いをし、手に持った帽子をどう扱つたらいいのかわからないかのように、もてあそびながら立つていた。この男の人が、墓を掘つていたうちの一人だということに

気がついた。彼は背が高くいかにも強そうだったが、体つきの若々しさに比べ、目には落ち着きが感じられた。

マーティの目は男の人を見ていたが、彼の呼びかけに応えようとはしなかった。彼は心の奥底から勇気をかき集めるようにして、もう一度マーティに話しかけた。

「奥さん、こんなときに言うべきではないとはわかってはいるんですが。たつた今、ご主人を亡くされたばかりなのに……。でも、今この時この場所をのがしては考えられないことなので……」

また一つ咳払いをし、手に持った帽子から目を上げると急いで続けた。

「クラーク・デイビスって言います。あなたとわたしは今、お互いが必要だと思えるもんで……」

マーティのハツと息を飲む声に、彼は急いで手を上げて「ちよつと待って」と、まるで命令するようないきなり口調で言った。

「これは良識的なことなんだ。あなたは夫を亡くし、わたしも独り身だし」

彼は壊れた車輪に目をやった。

「家族のところに帰る金もないようだし……。もし家族がいるとしてだが、それに、たとえ戻るところがあるとしても、来年の春まで東に向かう幌馬車隊はここを通らない。わたしにも女手が必要なんだ」

彼はそこで話をやめ、目を伏せた。しばらくしてから、また目を上げて続けた。

「わたしにはまだ幼い娘がいて、あの子にも母親が必要なんです。考えたんですが、もしわたしたちが、あなたとわたしと結婚すれば……」

マーティをしつかり見つめ、彼女と同じ目線になるようにしゃがみこんで、言った。

「わたしたちは、この両方の問題を解決できる。もう少し待つべきなんだろうけど、牧師さんはきょうまでしかここにいないし、この次まわってくるのは来年の四月か五月になってしまう。だから、どうしてもきょうでなくちゃだめなんだ」

彼はマーティの目に浮かんだ本物の嫌悪を見たのだろう、どもりながら言った。

「わ、わかつてます。わかつてますよ。まさかと思われるような話だけど、ほかにどんな方法があります?」

（ほかにどんな方法ですって?）

マーティはぼんやりした頭で考えた。

（まず死ぬだけ。それでおしまいよ。あんたと結婚するくらいなら、いいえどんな男とだって、結婚するくらいなら死んだほうがましだわ。行つて! あつちへ行つてよ!）

だが、彼はマーティのそんな思いに気づかずに続けた。

「わたしも、ずっとミッシーの父さんと母さんの二役をつとめようと一生懸命がんばってきたけど、畑仕事も家のことも両方ともうまくいなくて。かなりの土地もあるし、小さいけれど居心地のいい住まいもあるから、ミッシーの面倒を見てもらうかわりに、女の子が必要なものはひととおり提供する。それに、きつとミッシーを好きになれると思うんだ。あの子は元気のいい、かわいい子でね」

しばらくして、また続けた。

「あの子には女手が必要なんだ、わたしのミッシーには……。わたしが頼んでいるのは、母親になることだけ。ミッシーの母さんになつてもらうことだけで、それ以上は望んでいない。あなたとミッシ

「で寝室を使えばいい。わたしは物置小屋を使うから。それから……」

彼は少し言いよんだ。

「これだけは約束する。東部へ向かう次の幌馬車隊がやってきて、あんたが駄馬車に乗れるところまで行くつもりなら、そしてもしここにおいて幸せでないようなら、きつと家に戻るようにする。でも一つだけ条件があるんだ。そのときはミッシーも一緒に連れて行ってほしい。幼い子が母親なしで暮らすのはかわいそうだから」

彼は急に立ちあがった。

「じっくり考えてください、奥さん。でも、あんまり時間がないんで」と言うと、向きを変えて去っていった。

肩を落とした彼の姿は、今のことをどれほど思いつめて言ったものかを物語っていた。それでもマーティは怒りを覚えた。

「たとえどんな形の結婚であれ、たったいま夫の葬式から帰ったばかりの女に結婚を申し込んだりするなんて」

マーティは絶望を感じた。「死んだほうがましだわ」と、口にだしてつぶやいた。

「死んだほうがましよ。だけど、クレムの赤ちゃんはどうなるの？」

自分のためにもクレムのためにも、赤ちゃんを死なせることはできなかった。挫折感がマーティを襲った。

（わたしはなんてとこにいるんだろう）

誰も、誰ひとり知った人もいない、この荒れ果てた西部には。家族も友だちも手の届かないところにいて、まったくのひとりぼっちだった。

あの男の言っていることが、まちがっていないのはわかっていた。自分には彼が必要だった。だからなおさら憎らしかった。

「西部なんか、大嫌い！ だいつきらいよ！ あんな男なんて嫌い。あんな冷たい、みじめな男なんて。嫌い！ 彼なんかだいつきらいよ！」

しかし、どんなに怒りをぶつけても、彼に落ち度がないのはわかっていた。

マーティは涙をふいて、日陰の草の上から立ちあがった。あの男が返事を聞きに、もったいぶった態度で戻ってくるのを待つつもりはない、と頑固に思った。そして、馬車の中に入って、自分のものと言えるわずかな荷物をまとめはじめた。

ミッシーのママ

マーティとクラークは、口もきかず黙って荷馬車に乗っていた。牧師さんは、ベン・グラハム一家に寄って食事をする事になっていた。ミッシーもそこにいて、父親が葬式に出ているあいだ、グラハム家の女の子たちに面倒を見てもらっていた。二人は牧師さんに式を挙げてもらってから、ミッシーを連れて家に帰ることにした。

マーティは体を硬くしながら、押し黙ったまま馬車に揺られていた。風に吹かれてほてった顔に落ちた髪をけだるそうに手でかきあげるのを、クラークは心配そうに見た。

「もうそんなに遠くない。日照りの中を行くのはひどく暑いから、日よけに帽子が必要なんだが」
マーティはまっすぐ前を見たまま、何も答えなかった。

「なんだってこの人は、わたしの頭の上に照りつける日ざしなんか気にしてるのかしら。わたしなんかどうだっつかまうことないのに。もう、これ以上悪いことなんて起こりやしないわよ」

マーティは自分の意思に逆らって出てくる涙を見せまいとして、クラークから顔をそむけた。隣に座っている薄情な男から、これっぽっちだって同情なんかされたくなかった。

馬は重い足取りで進んでいった。正確には道とは言えないような道の、わだちに沿って馬車がガタゴト揺れて進むので、体中が痛かった。

小さな丘が連なるふもとに、グラハム家とおぼしき農家が見えたとき、マーティはほっとした。前庭に馬車を乗り入れると、クラークは身軽に馬車から飛び降り、マーティが降りるのを手伝おうとして振り向いた。マーティはもう無感覚になっていて、彼の手助けを断ることすらできなかった。それに、もし自分で降りようものなら、土ぼこりの中に落ちてひっくり返る恐れがあった。クラークは軽々とマーティを抱えおろし、彼女の足元がしつかりするまで手を離さなかった。それから馬のつなぎ止めに手綱を投げかけると、身振りで先に家の中に入るよううながした。

マーティはあたりのものが何も目に入らなかった。ただ、この場のしらじらしさを何ひとつ記憶にとどめまいとした。ドアを開けたグラハムの奥さんが、二人を見比べてびっくりしていたのだけは覚えていた。部屋の中には何人かいて、昼食の用意がととのつたと声をかけられるのを待っているようだった。部屋の隅のほうでは牧師さんがベンと思われる人と話をしていて、子どもたちもみなそろっていた。でもマーティは、何人いるか数えようともしなかった。クラーク・デイビスはグラハムの奥さんに事情を説明し、牧師さんやベンにも話してくれるように頼んだ。

「わたしたちは決めたんだが……」

「わたしたちですって？」　マーティは心の中で怒り狂って言った。

「わたしたち、じゃなくって、わたし、でしょ」

「わたしたちは、牧師さんがここにいなさるあいだに式を挙げてもらおうと決めたんです。つまりその……クラリッジの奥さんには家ができて、わたしのミッシーには母さんができることになるもんですから……」

「それがいちばん、道理になかってるってもんですよ」とグラハムの奥さんが言い、「ああ、そのとおりだ」と牧師さんの言うのが聞こえた。

マーティのまわりでみんながせわしく動きまわって場所をつくり、そんなに簡単でいいのかと思える短さで、聞きなれた結婚の誓いのことばが交わされた。

マーティは自分の言うべきことばをちゃんとつぶやいていたにちがいない。というのも、牧師さんが「ここに、この男と女を夫婦と認める」と言っているのが、もやの中からぼんやり聞こえてきたからだ。

まわりでまた人々が動きはじめた。グラハムの奥さんはテーブルに二人分の食事を余分に用意してくれて、「さあ、座って。出かける前にわたしたちと一緒に食べていってくださいな」と、二人を元気づけるように言った。みんなも食卓についた。小さな子は、大人たちが葬式から帰ってくる前に、年かさの女の子が面倒を見て、先に食事をすませていた。

牧師さんが食前の祈りをささげ終わると、マーティのまわりでは会話がはずんだ。確かに何かを食べていたのだろうが、あとになって、そのとき何を食べたのか、またおもしろかったのかどうかもマーティは思いだせなかった。まるで何かにコントロールされている機械のように動き、そして無意識のうちに話しさえしていた。

再びみんなが動きはじめ、テーブルを離れて帰る支度にかかった。牧師さんは用意された弁当をカバンの中に詰めこみながら、みなに挨拶していた。グラハム家の上の男の子が、納屋から牧師さんの馬を引いてきた。

出発する前に牧師さんはマーティに向かって、飾りけのない素直なしぐさで彼女の手を取り、「これからの何カ月か、特別に神さまがあなたと共にいてくださるよう祈っています」と言った。ペンとクラークは馬が待っているところまで見送りにいき、グラハムの奥さんは戸口のところでさようならを言った。

牧師さんが行ってしまうと奥さんは部屋に戻り、ペンとクラークは荷馬車に馬をつなぎ、いつでも出発できるよう支度にかかった。

「サリー・アン、行ってミッシーちゃんを起こしておいで。それから帰る支度をしてあげてちょうだい。ローラ、あなたとネリーでテーブルを片づけてお皿を洗って」

こう言いながら、奥さんも忙しく働いていた。マーティは自分が何をしているのか、まるでわかっていなかった。ただ、ぐったりと椅子に座っているマーティにかまわずたち働いている、まわりの人たちの動きだけはわかっていった。

サリー・アンが、ちよつと髪をクシャクシャにした小さな女の子を抱いて戻ってきた。その子はまだ眠気が覚めていないのに、なんとなくうれしそうにニコニコしていた。見たことのないマーティの顔を見つめている深いブルーの瞳と笑顔が印象的だった。

（この子がミッシーにちがいない）

マーティは感情のないまま、そう思った。

クラークが部屋に入ってくると、その女の子はうれしそうに声を上げ、手を差しだして迎えたのでわかった。クラークは娘を抱きあげると頬ずりし、それからグラハム夫妻にお礼を言うと、マーティ

のほうを向いて帰る合図をした。

グラハムの奥さんはマーティと一緒に外に出たが、「おめでとう」とか「幸せな結婚を」などとはいつさい言わなかった。またほかの誰も、そんなことばを口にだそうという素振りさえも見せなかったので、マーティはほっとする思いだった。誰かがたつたひと言でも口にしたら、たとえ心から言ってくれたとしても、マーティは自制を失い、ワツと泣きだしてしまったにちがいない。だが、「おめでとう」どころか「結婚」ということばさえも口にする者はいなかった。この開拓者たちは、ほかの人の感情に対してとても敏感だった。みんなは、お隣さんどうしの挨拶を交わしただけだった。ただグラハムの奥さんだけは、特別な優しさを込めた目でマーティを見つめて言った。

「四、五日したら落ち着くでしょうから、そしたら訪ねていきますよ。近くにときおり訪ねていける女の友だちができるなんて、ほんとにうれしいことだわ」

マーティは奥さんに礼を言い、そして馬車は出発した。三人は再びほこりつぽい道と焼けつくような太陽の下に身をゆだねた。

「さあ、あそこがそうだ」

マーティはクラーク・デイビスの声に驚いて飛びあがりそうになったが、それでも彼の指さすほうに目を向けた。

北側を木々で囲まれ、西が少し高くなったところに、隣に座っている男の所有する農場があった。小さいけれど小ぎれいな家が少し離れたところに建っていて、外には井戸とその反対側に庭があった。

戸口への小道に沿って丈の低い木々が植わっていて、遠くからでも盛りを過ぎた花が残っているのが見えた。家から少し離れたところには、馬や家畜のための丸太でできた頑丈な納屋があり、その奥の木立ちの中に豚の囲いがあった。住まいと納屋のあいだには鶏小屋もあって、あちこちに小さな建物が点在していた。それらの建物が何に使われるかを知っておかなければならぬだろうが、今は疲れきって気にとめるゆとりもなかった。

「素晴らしいわ」

思わず口をついて出たことばに、マーティはわれながら驚いた。そんなことを言うつもりはなかったのに。

とにかく、それはクレムと一緒に夢に描いていたような農場だった。そう思うとマーティの心は痛み、静かなすすり泣きが口からもれるとハツとして息を止めた。マーティはそれ以上何も言わなかった。ちようどそのとき、自分の家を見て喜んでるミッシーがパパの注意を引きつけてくれていたので、ほっと胸をなでおろした。

三人が家の前に着くと、犬が一匹飛ぶように走ってきて、クラークもミッシーも愛情を込めてその犬に「ただいま」を言っていた。

クラークは、マーティが馬車から降りるのに手を貸しながら優しく話しかけた。

「外は暑かったから、涼しい家の中に入って少し横になるといい。居間の向こうに寝室があるから。ミッシーの面倒はわたしが見るし、何かしなければならぬことがあればやっつくから。どっちみち、きょうはもう遅くて畑仕事はできないしね」

クラークは家の戸を開けて、マーティがこれから自分の家庭となる、見知らぬ家の中に入っていくのを見守っていた。それから、ミッシェを連れてどこかへ行ってしまった。

一刻も早く横にならなければ倒れてしまいそうだったので、マーティはあたりを見回すゆとりもなく、まっすぐ台所を通って居間の向こうにある寝室へと急いだ。ベッドに誘いこまれるように、靴を脱ぐとそのままそこに倒れこんだ。家の中は涼しかった。マーティは疲れきっているにもかかわらず、混乱した思いをなんとかしようとした。しかし、ただすすり泣くしかなかった。やがて乱れた思いも静まり、深く、そして苦しい眠りへと引きこまれていった。